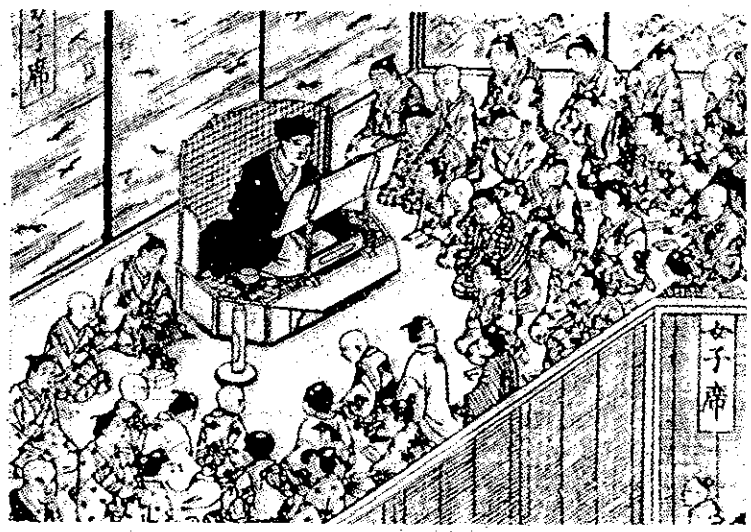
3 儒教と国学の考えかた

儒教の歩み　日本人は儒教から，人間には心のもちかたや行為のしかたに，いかなるときにも従わなければならない道というものがあることを学んだ。また，為政者は，人々の安らかな生活を維持する責任があり，そのためには，為政者自身がまず道徳的な人間でなければならないことを学んだ。

大化改新およびその後の律令体制は，儒教の教える仁政の実現を意図したものである。江戸時代になると，幕府の奨励と民間にすぐれた儒者が多くあらわれたことによって，儒教はもっともさかんになった。儒教は，江戸幕府が階層的な封建秩序を維持するための思想上のよりどころであり，また為政者である武士がとくに守るべき教えであるとされた。しかし，町人が社会的に台頭し人間的平等を自覚しはじめると，儒教は武士だけが守るべきものでなく，すべての人間が等しく守るべき教えであると主張されるようになった。たとえば，それまでいやしめられてきた商行為の倫理性が儒教によって町人の間で説かれた[1]



江戸時代の庶民教育（孝経童子訓）儒教などを庶民にわかりやすく講義しているが，男子と女子の席ははっきりと分けられていた。

(1) 代表的なのは石田梅岩（→p. 132）の心学。梅岩は「先モ立チ我モ立ツ」という考えかたで商行為の倫理性を肯定した。

湯島聖堂の学問所　聖堂は孔子らの聖賢をまつる廟。1691年(元禄4)，5代将軍綱吉のとき，幕府は林家に湯島の土地をあたえ，聖堂および付属施設の学問所をつくらせ，主宰させた。これが幕府直轄の「学問所」となったのは1790年(寛政2)のことである。

ように，儒教はひろくすべての層に浸透していった。江戸幕府の封建的秩序の思想上のよりどころであった儒教が，幕末においては，社会変革の思想上のよりどころとしてはたらいたことも注目される。

武士と朱子学

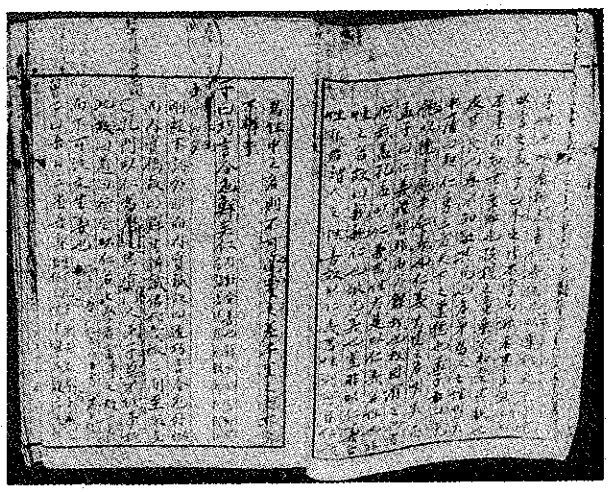
江戸幕府が奨励した儒学は朱子学[1]であった。林羅山(1583～1657)，山崎闇斎(1618～82)などの朱子学者たちは，とくに敬を重んじた。敬は「うやまう」ではなく，「つつしむ」であり，自己の内面に私利私欲がすこしでもあることをいましめ，つねに道(理)と一つであることを求めるきびしい心のありかたである。人格を高貴に保とうとするこのようなきびしさは，武士たちに深い共感をもって受け入れられた。

(→p. 42)

敬を重んじる者は，同時に道が外に表現されたものである礼儀を正すべきであり，礼儀正しく行動すれば，侵しがたい威厳が形成されると考えられた。ここから武士たちは，階層の上下にかかわらず他人からいやしめを受けることのない誇り高い武士として礼儀を正すことになった。しかし，礼儀の具体的内容は，上下，自他の差別と深くかかわるものであったから，礼儀を重んじる考えかたは，階層的な秩序を維持しようとする幕府の意図と矛盾するものではなかった。

このように朱子学は，自己の人格を高貴に保つことを教えたが，同時に，自他を道(理)のままにきびしく批判することにもなった。その

(1)　中国の朱子の説いた儒学。窮理と持敬が朱子学の基本となる2本の柱である。



『論語古義』(伊藤仁斎著)
写真は「仁」を解説した部分。

ために，人と人との融和合一を求める精神に欠けるという批判が生まれ，朱子学に満足できない儒者の間に誠を重くみる傾向が生まれた。

◎中国では，朱子学および朱子学を批判する陽明学(1)が生まれたが，誠を重くみる儒学は生まれなかった。誠を重くみる儒学の誕生は，日本独自のものである。誠を重くみる儒学では，朱子学や陽明学にみられる理に対する関心が希薄で，ひたすら心情の純粋さが尊ばれた。日本における陽明学への関心は，幕末にもっとも高まったが，誠を重くみる立場で陽明学を理解する傾向が強かった。なお，陽明学にはじめて強い関心をもったのは中江藤樹(2)(1608～48)である。彼は近江聖人とよばれ，真実の生きかたを求めるひたむきさがたたえられた。

(→p. 42)
(→p. 182)

伊藤仁斎

誠を重くみる傾向は，人と人との融和を重んじ，心情の純粋さを尊ぶ日本の伝統から生まれたものであるが，この傾向を儒学として強調したのは，町人社会からでた伊藤仁斎(1627～1705)である。

仁斎は，「われよく人を愛し，人またわれを愛し，相親しみ，相愛し」て，一つにとけあうのが理想であり，いたずらに自己の人格を高貴に保つことだけを求める者は，自他の融和を破壊すると考え，誠こそが

(1) 王陽明の説いた儒学。朱子学を批判して「良知を致す」ことを強調した。
(2) はじめ伊予の大洲藩に仕えたが，母への孝養を思い，郷里の近江小川村に帰り，彼の徳をしたって集まった門人の教化に努めた。「敬は愛にもとづく，愛の極を敬となす」(『論語郷党啓蒙翼伝』)などということばに思索の深さがうかがえる。

伊藤仁斎(天理図書館蔵)　京都堀川の材木商の子として生まれ，はじめ朱子学や陽明学などを学んだがあきたらず，孔子，孟子の教えを直接にきわめる古学を振興した。その思想は仁および忠信を主とするものである。終生仕官せず，市井の学者として塾「古義堂」により弟子の育成にあたった。

主著『語孟字義』『童子問』

道徳の根本として人々の心に求められなければならないとした。彼はこの誠を「真実無偽」，すなわち「わたくし」のない心情の純粋さと理解した。しかし，仁斎は心を誠にすることのむずかしさを知っていたから，人々が日々の生活のなかで努めるべき道徳として忠信を説いた。忠も信も「まこと」であるが，忠信とは「物に接するの間，欺かず詐らず，十分真実，堅く執って回らざる」ことであった。他者に対する心情の真実さに生きることであった。仁斎は，この忠信に生きるとき，心がしだいに誠になるとともに，その他者を思う心が，好ましい結果をもたらすと考えた。彼は，このような人間の最高のありかたを仁とし，仁は愛であるという。真実の愛は，日々忠信に生きることによって実現されるものであった。

(→p.183)

誠の実践　誠を重くみる傾向は，近世の日本人の倫理思想の基本的な傾向となり，幕末にもっとも高揚した。

吉田松陰(1830～59)も，聖人の教えは「一つの誠の字の外なし」といい，また，誠には，実と一と久という三つの要素がなくてはならないとした。国や君や民を思うおさえがたい心情は，死を覚悟して断固として実践に移されなければならず，他事に心を用いないでそのことに専一であるべきであり，また，実現されるまで休むことなく追求されるべきである。これが松陰のいう実・一・久であり，このように生きてはじめて，誠に生きたということができる。仁斎にはじまった誠の倫理は，明治維新という大きな変革を実現した志士たちの心にも，生きつづけていたのである。

荻生徂徠(荻生家蔵)　西の仁斎とならび称せられる。将軍徳川綱吉の侍医の家に生まれ独学で古文辞学を開く。柳沢吉保の儒臣となり，のち辞して護園の地（江戸日本橋茅場町）に塾を開き子弟の教育にあたった。その古文辞学の精神は国学の復古運動に影響をあたえた。また，その儒学の理解に近代的精神がくみとられる。

主著『弁道』『弁名』

誠を重んじる近世の人々の間には，誠はかならず人に通じ，誠をもってすればかならずことはなるという楽天的な考えかたがあった。したがって，人との和合が実現せず，ことが成功しないときには，ひたすら自分の誠の不足を反省することになった。また，それとは逆に，自分の誠に自負をもち，自分の行動をすべて正当化することもおこった。これらに対して，仁斎は，いかに心情が真実であっても，人間社会のなりたちについての学問を修めなければ，行為についての判断を誤ることがあると警告していた。人間社会のなりたちについての学問をふまえつつ，日々の実践において他者への真実に生きることがたいせつであるというのが，仁斎の考えかたであった。

荻生徂徠

仁斎についで江戸中期にあらわれた荻生徂徠(1666～1728)は，また独自の考えをもっていた。朱子学では，宇宙をつらぬく理を行為の規準と考え，これをきわめ明らかにすることが必要であると説いていたが，徂徠は，人間が理を追求しても，主観的に理解することになるから，理は行為のよりどころにはならないと説いた。そして，人間のよるべき道は，中国古代の帝王が国を治めるためにわれわれにあたえた礼楽(儀礼的諸制度と音楽)以外にはないと理解した。人間の自然の性情に即しながら，真実な生きかたをするように人々を導くにはどうすればよいかと考えて，帝王が作為したのがこの礼楽であるという。徂徠は，人々が経書により，中国古代の帝王である聖人の礼楽

石田梅岩(心学参前舎蔵)。彼は自宅で講義をおこなって自らの学問をひろめ，石門心学をおこした。

に従って生きれば，おのずから好ましい人がらと，好ましい世の風俗がつくられるという。そして仁斎のように誠を説いても，世の中は治まらないという。この徂徠の考えかたは，社会秩序は人間がつくるものであるという考えかたのめばえを示すものであり，明治時代に西洋の政治的，社会的諸制度を採用するさいの思想的基盤を形成したことは注目される。

国学のおこり

仏教，儒教が伝来したのち，これらの外来の教えに対抗して神道(しんとう)の諸派が生まれた。神道ということばは，おもに神々に対する祭事の意味で古くから用いられているが，平安時代の末期になると教義をもつ神道があらわれた。教義はいずれも仏教あるいは儒教の思想によって神話を教義化したもので，正直を中心に清浄と慈悲を説いて民衆に多くの感化をあたえた。

正直とは，道理に対する素直(すなお)さである。一面では清き明き心の伝統を受けつぎ，心情が純粋になれば，その状況において，いかに行為すべきかの道理が明らかになると考えられた。

◎この正直は，江戸時代になると偽りのないことがおもな内容となった。石田梅岩(1685～1744)などによって，「はっ」と思う惻隠(そくいん)の心のままに生きることが正直であると説かれ，町人の重要な道徳となった。

江戸時代の中ごろ，仏教や儒教によって神話を理解することをやめ，『古事記』などの古典を直接研究し，日本人の固有の考えかたのなかに真実の生きかたを求める国学が生まれた。これは中世以来の神道の流

本居宣長（浜田常成作）　伊勢松阪の商家に生まれ，23歳のとき京都にのぼって医学を研究し郷里に帰って開業した。この間に歌文の研究をもし，やがて賀茂真淵を師として30数年を費やして『古事記伝』48巻を完成した。また，古の道に「もののあはれ」や「やまとごころ」を見いだしそこに理想を求めた。

主著『源氏物語玉の小櫛』『古事記伝』

れをくみ，復古神道ともよばれた。その思想は，道徳をもっぱら感情的側面からとらえようとするもので，代表的な人物は本居宣長（1730～1801）である。

本居宣長

宣長は，日本の古代にとくに教えがなかったのは，道徳が実現されていたからであるとし，仏教や儒教の議論を人間のさかしら[1]からでたつくりごととして認めなかった。真心（→p.183），つまり「よくも悪くも生まれつきたるままの心」を尊重し，人々がさかしらをさって真心にもどれば，世の中は大過なく平和に治まる。儒教は，人間のありのままの性情をおさえ，完全無欠な人間であることを求めるさかしらな教えである。宣長は，このように人間の自然のままの性情を肯定したが，欲望の無制限な追求を認めず，また，欲望を追求すればいつでも満たされるなどとは考えなかった。欲と情とは区別され，「欲はただねがひもとむる心のみにて感慨なし。情はものに感じて慨歎するものなり」とされた。

また，宣長は，「もののあはれ」を知ることに文芸の本質があるとみたが，「人の情はわれながらわれにまかせぬことありて，お

「古事記伝」（本居宣長著）の一部

(1)　宣長は「天地のことはり」は人間にはおしはかれないものであると考えた。儒仏の議論は，人間の浅薄な知恵による推論であり，したがって，つくりごとであるという。

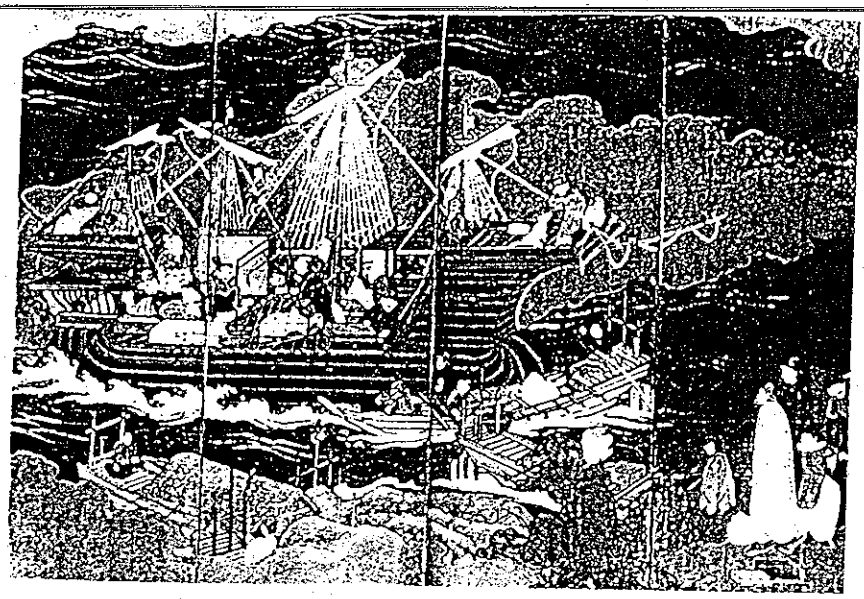
のづからしのびがたきふしもあるものなり」と知るとき，「もののあはれ」をもっとも深く理解できるといっている。宣長は，「もののあはれ」を知ってはじめて歌をよむことができるし，このあわれを知るものだけが，人の悲しみに共感し同情することができると考えた。ここから「もののあはれ」を知ることは，文芸の本質であるとともに，あわれを知ることが道徳のもとであり，あわれを知る人を「心ある人」とみなすことになった。
(→p.183)

◎仏教や儒教が日本人のものの考えかたを豊かにしたことを認めない宣長の考えかたには問題があるが，彼が日本人のものの考えかたの核心につながる一面をとりだした功績は見おとすことができない。彼は古道として日本人固有の習俗を問題にした。これは，われわれの生活の底辺に伝わっている古来の習俗の研究が，日本人を知るために重要であることを教えたものとして注目される。明治以後における柳田国男(やなぎたくにお)(1875～1962)や折口信夫(おりくちしのぶ)(1887～1953)の民俗学は，この関心を継承したものである。

4 西洋思想の受容

和魂洋才(わこんようさい)

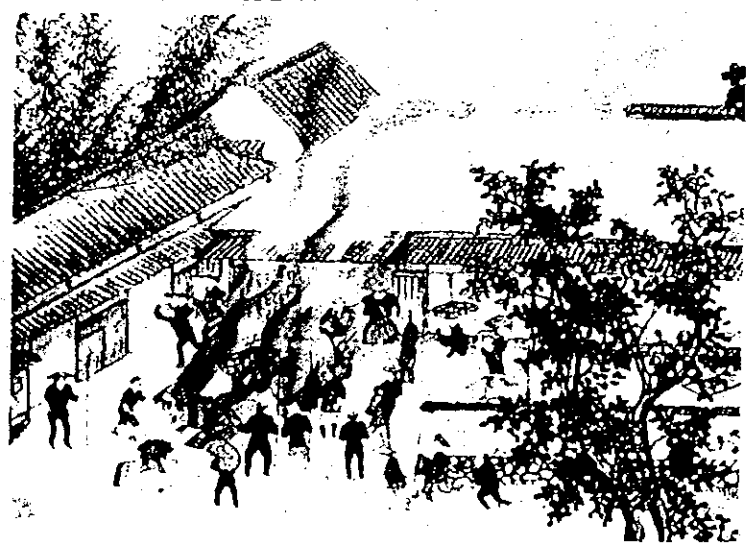
日本人が西洋の文化に接したのは，16世紀半ばに渡来したフランシスコ・ザビエル(1506～52)のキリスト教伝道をとおしてのことであった。一時は，キリシタン大名の保護のもとに教会や学校が設立され，西洋の文化が紹介されたが，その後のキリシタン弾圧と鎖国政策によって，西洋文化の流入は，わずかに長崎のオランダ商館をとおしての科学・技術的な蘭学(らんがく)に限定された。それにもかかわらず，こうしたキリスト教や蘭学が日本人にあたえた影響は大きく，江戸時代の末には，それは封建体制をつき動かす批判精神を形成し，やがて



南蛮人との交易（宮内庁蔵の南蛮屏風）南蛮船が入港したときの情景をえがいたもの。

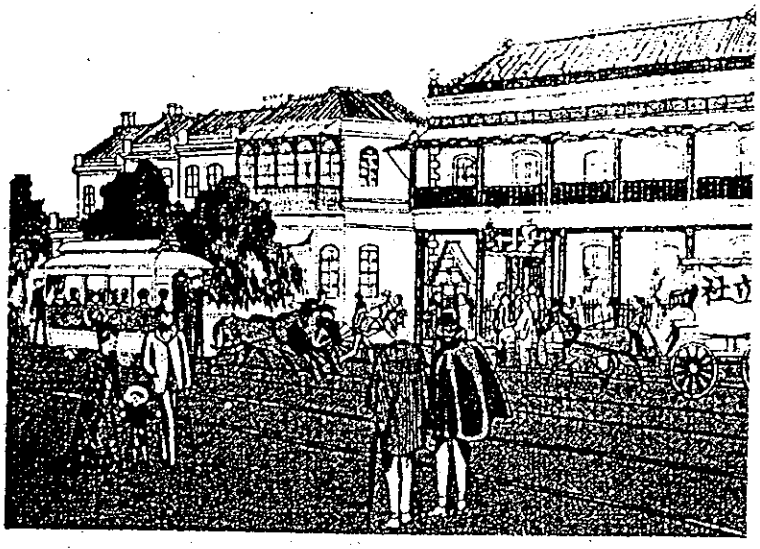
近代精神へと成長していった。その後，明治維新によって西洋の文化が積極的にとりいれられ，日本の近代化は急速におしすすめられることになった。

日本における近代精神の形成は，このような西洋文化との接触をぬきにして考えることはできないが，しかし，すべてが西洋からの影響によるというものでもない。江戸後期の儒学や国学には，近代精神が育つ精神的基盤が準備されていたし，また，万人が平等に農耕生活を営む「自然の世」を理想とする安藤昌益(1)（1703ごろ～62ごろ）の思想や，幕末の農民一揆や



農民一揆（明治はじめの岡山県の一揆）　幕末から明治のはじめにかけて，生活難にあえぐ農民や町人が富豪を襲い，家を焼き払うなどの一揆や打ちこわしが頻発した。

(1)　江戸時代中期の思想家。当時の支配階級の不耕貪食を否定して，農耕労働の尊いことを説き，身分階級，男尊女卑を否定した。『自然真営道』『統道真伝』などを著した。



明治はじめの東京の京橋通り（錦絵）

「世直し」の運動のなかに，近代精神の萌芽をみることもできる。

また，西洋思想の受容のしかたにおいては，幕末の開明論者佐久間象山(1811～64)の「東洋道徳，西洋芸術，精粗遺さず，表裏兼該し，因りてもって民物を沢し，国恩に報ゆる」ということばに明確に示されているように，維新前後の思想的指導者たちには，東洋の伝統的精神のうえに西洋の文化を知識，技術として摂取しようとする姿勢が顕著にみられる。彼らは，そうすることによって国家の独立と国力の充実をはかろうとしたのであるが，こうした「和魂洋才」的姿勢は，維新後においても大きく変わることがなかった。

福沢諭吉と啓蒙思想

明治のはじめ，西洋の新しい思想を紹介し，日本の古い封建的な制度や思想を批判したのは，明六社グループといわれた啓蒙思想の知識人たちであった。『西洋

福沢諭吉　中津藩の貧しい武士の家庭に育ち，はじめ漢学を学び，のちには蘭学を志し長崎へいき，さらに大阪の緒方洪庵の門下生となる。23歳のとき江戸築地に蘭学塾（のちの慶応義塾）を開く。幕府の使節とともに欧米を3回もめぐったが，官に仕えず，自主独立を説き封建思想の打破に努めた。

主著『西洋事情』『学問のすゝめ』『福翁自伝』

事情』『学問のすゝめ』『文明論之概略』などをつぎつぎと著し，日本の近代化の方向に大きな影響をあたえた福沢諭吉(1835～1901)は，その代表的な思想家である。

福沢は，洋行の経験と当時の日本の状況に対する深い認識をふまえて，「東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに，東洋になきものは，有形に於て数理学と，無形に於て独立心と，此二点である」と考え，この二つの精神を高揚することを訴えた。

学問の力

身分重くして貴ければおのづからその家も富んで，下々の者よりみればおよぶべからざるやうなれども，その本を尋ぬればただその人に学問の力あるとなきとによりてその相違もできたるのみにて，天より定めたる約束にあらず。諺にいはく，「天は富貴を人にあたへずして，これをその人の働きにあたふるものなり」と。されば前にもいへるとほり人は生まれながらにして貴賤，貧富の別なし。ただ学問を勤めてものごとをよく知る者は貴人となり富人となり，無学なる者は貧人となり，下人となるなり。

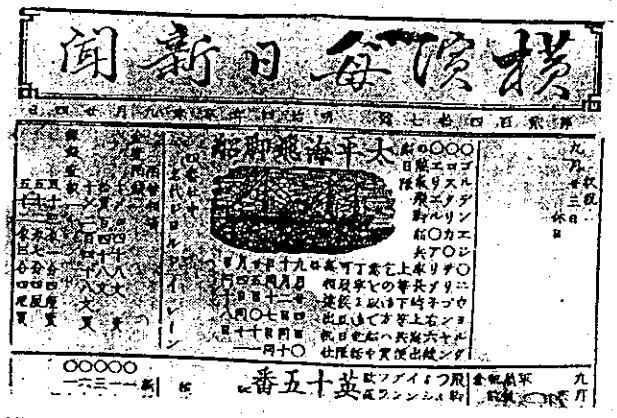
福沢諭吉『学問のすゝめ』

三田演説館（東京都　慶応義塾大学）　人々が自由や人権などの新しい思想を身につけるためには演説が重要だと考えた福沢は，1875年に三田演説館を建てた。

「独立心」とは，彼の有名な「天は人の上に人を造らず，人の下に人を造らずと云へり」ということばが示すように，人はみな生まれながらにして天から等しく人権があたえられているという「天賦人権論(1)」にもとづく個人の自由，独立の精神である。それは同時に，西洋列強に植民地化されない国家の

(→p.184)

(1) 人は生まれながらにして自由，平等，幸福を求める権利をもっており，どんな人でもこれを侵すことはできないとする思想。



横浜毎日新聞　1870年に発刊された日本最初の日刊紙。明治初年以来，新聞，雑誌，出版物の刊行がさかんになり，啓蒙思想の普及に役だった。

独立を確立しようとする精神の主張でもあった。つまり，国家の独立は個人の独立なくしてはありえず，個人の独立は国家の独立なくしては守ることができないという，当時のことばでいえば，民権と国権との確立を同時に求める精神が彼のいう独立心であった。「一身独立して一国独立す」という福沢のことばは，このことをよく示している。

また，「数理学」の精神とは，実証的な認識と合理的な思考にもとづいた近代科学（サイエンス[1]）の精神であるとともに，「人間普通日用に近き実学」という日常生活の実際に役だつ実用的，実利的な学問の精神であった。こうした学問を習得してものごとをよく知るとき，一身，一家の独立が可能になり，それが一国の独立につながるとして，彼は『学問のすゝめ』を説いたのである。

こうした福沢の自由，独立の思想は，その後，中江兆民[2]（1847～1901），植木枝盛[3]（1857～92）らにひきつがれ，自由民権運動の一つの動因となった。

内村鑑三とキリスト教

キリシタン弾圧以来，禁じられていたキリスト教が，明治にはいって公に認められると，多くの知識人がそれにひきつけられるようになった。そして，彼らのキリスト教思想（プロテスタンティズム）は，当時の日本人の思想に新しい世界を開く役割をはたした。なかでも大きな影響をあたえたのが内

(1)　はじめは物理学や化学などの自然科学および数学をさしたが，のちにはこれにとどまらず，ひろく社会科学や人文科学をも含めている。
(2)　土佐出身の思想家。フランス留学ののち，ルソーの『社会契約論』を訳述した。
(3)　土佐出身の政治家，自由民権論者。著書に『民権自由論』『天賦人権弁』などがある。

内村鑑三　高崎藩士の子として江戸で生まれ，厳格な儒教の教育を受け，武士道の精神をつちかわれる。札幌農学校に学び，抜群の成績で卒業しアメリカに渡る。ここでキリスト教の信仰を不動のものにする。帰国してからは，無教会主義の立場から社会の正義と平和のために一生をささげた。

主著『基督信徒のなぐさめ』『求安録』

村鑑三である。
(1861～1930)

内村は，神の前に立つ独立的人格としてのありかたを強調して，教会や儀式にとらわれることを排し，直接，聖書のことばによることを重んじて無教会主義の立場をとった。こうした信仰の立場は，教会制度のみならず当時の国家主義的な体制とも衝突せざるをえなかった。(→p.185)
第一高等中学校の講師であった内村は，教育勅語にしるされた天皇の署名に最敬礼しなかったために辞職させられた。これをきっかけとしてキリスト教と国家，あるいは宗教と教育との関係をめぐっての大論争がひきおこされたが，内村自身は「二つのJ」すなわちイエス(Jesus)と日本(Japan)に生涯をささげようと誓った愛国者であった。この事件は，当時の国家が要求する愛国のありかたと内村らキリスト者のそれとの矛盾があらわれたものといえよう。

また，内村は日本の精神的伝統にも高い誇りと関心をいだいてい

日本人とキリスト教

余は，基督教外国宣教師より，なにが宗教なりやを学ばなかった。すでに，日蓮，法然，蓮如，その他敬虔なる尊敬すべき人々が，余の先輩と余とに宗教の本質を知らしめたのである。幾多の藤樹がわれらの教師たり，幾多の鷹山がわれらの藩侯たり，幾多の尊徳がわれらの農業指導者たり，幾多の西郷がわれらの政治家たり，過去の余はかくのごとくにして作られ，ついに召されてナザレの神の人の足下に平伏すにいたったのである。一国民はいふまでもなく，ひとりの人間といへども，一日にて回心せしめらるべきものと信ずるなかれ。真の意味における回心は，数世紀の事業である。

内村鑑三『代表的日本人』

近代化の原動力

日本の変貌は全世界周知の事実である。かかる大規模の事業にはおのづから各種の動力がはいりこんだが，しかしもしその主たるものを挙げんとせば，なんぴとも武士道を挙ぐるに躊躇しないであらう。全国を外国貿易に開放したとき，生活の各方面に最新の改良を輸入したるとき，また西洋の政治および科学を学びはじめたときにおいて，吾人の指導的原動力は物質資源の開発や富の増加ではなかった。いはんや西洋の習慣の盲目的なる模倣ではなかったのである。　　新渡戸稲造『武士道』

た。武士出身であった彼のキリスト教信仰は，自ら「武士道の台木に接いだキリスト教」と規定しているように，武士道という精神的基盤のうえに形成されたものである。さらに，英文で書かれた『代表的日本人』では，5人の代表的な偉大な日本人を紹介しながら，日本の精神的伝統を称揚ないし弁護している。

こうした傾向は，内村だけでなく，植村正久(1857～1925)，新渡戸稲造(1862～1933)などの当時のキリスト者にも一般的であった。内村と同じように武士出身であった植村は，武士道精神を完成するものとしてキリスト教をとらえていたし，また，仏教や儒教のなかにもキリスト教信仰につながる要素があると考え，日本人による日本人宣教師の養成に努めた。また，札幌農学校で，内村とともに学び「二つのJ」に生涯をささげることを誓いあった新渡戸は，キリスト教が日本化するためには武士道精神が不可欠であるとして，「日本の魂」という副題をもつ『武士道』を英文で著している。

近代的自我のめばえ

自由民権運動をへて，明治も半ばをすぎると，初期啓蒙期の国権と結びついた民権の自由，独立の主張ではなく，政治からはなれた個人の内面世界の自由，独立が求められてきた。

北村透谷(1868～94)は，はじめ自由民権運動に参加していたが，やがて政治の世界から文学の世界に移り，自己の内面的な要求を現実の世界(「実世

「若菜集」(左)　明治30年に島崎藤村が著した叙情詩集。「明星」(右)　与謝野鉄幹によって明治33年に創刊された短歌誌。

界」)においてではなく，精神の内面の世界(「想世界」)において実現しようとした。しかし，それは自閉的に内向することではなく，外なる現実世界に対抗できる内的根拠を確立しようとする努力であった。

こうした個人の内面世界の自由と独立を訴える傾向は，明治20～30年代にロマン主義運動としておもに文学の世界で展開された。透谷と同じ「文学界」の同人であった島崎藤村(1872～1943)は，『若菜集』で新生への願いをみずみずしい感覚でうたい，「明星」同人の与謝野晶子(1878～1942)は，『みだれ髪』で内なる官能の世界を情熱的にうたった。

近代的自我の苦悩

透谷は，「実世界」と悪戦苦闘しながらも，けっきょくはその圧力にやぶれて自殺した。このような個我の内面世界の主張は，当時の社会的現実の状況とは大きなへだたりがあり，人々はその矛盾に悩まなければならなかった。日本が，日露戦争(1904～05)で勝利をおさめ，その国際的地位が高まり，対外的危機感がゆるむと，この苦悩はいっそう深くなった。

透谷らの先駆的努力をひきついだ自然主義者たちは，それまでの古い思想や行動の型にとらわれずに，事実をありのままに直視し，自己の内面の自然な生を大胆に解放しようとした。しかし，そこに暴露された生は，寂莫で悲痛に満ちた生であった。あまりにも自己および自

鷗外，漱石の住んだ家（愛知県「明治村」保存）　2人が前後して住んだ家で，現在の東京都文京区にあった。

己の自然だけに自閉的にとらわれて，新しい建設や理想をもつことができなかった。

このような自然主義に対して，夏目漱石（なつめそうせき）（1867～1916）は，いたずらに自己の自然だけにとらわれるのではなく自己の確立を他者あるいは社会とのつながりのなかでとらえ，「他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」という倫理的な個人主義を追求しようとした。漱石は，明治の日本の外発的で上すべりな開化を批判して，内発的開化の必要を訴え，そのためには，まず主体的な「自己本位」性を確立しなければならないと考えた。（→p.185）しかし，こうした自己の確立を追求するとき，それを追求すればするほど，彼は自己だけを確立しようとする自己内部のエゴイズムとたたかわざるを得なくなった。自己の確立とエゴイズムの克服という，たがいに矛盾するものを追求する彼の苦悩は，その作品に色濃くあらわれている。漱石はこうした苦悩のなかで，自己をこえるものを求め，それによって自己を生かす道をさぐり，晩年には「則天去私」という無我の境地を願うようになった。

夏目漱石

森鷗外

作者	作品名	作者	作品名
二葉亭四迷	浮雲(1887)	森　鷗外	舞姫(1890)　阿部一族(1913)
北村透谷	蓬莱曲(1891)		高瀬舟(1916) 渋江抽斎(1916)
	内部生命論(1893)	夏目漱石	吾輩は猫である(1905)
徳富蘆花	自然と人生(1900)		三四郎(1908)　こころ(1914)
国木田独歩	欺かざるの記(1893～97)	平塚らいてう	元始女性は太陽であった
樋口一葉	たけくらべ(1896)		(「青鞜」所収　1911)
高山樗牛	滝口入道(1894)	武者小路実篤	お目出たき人(1911)
	美的生活を論ず(1901)	志賀直哉	暗夜行路(1921～37)
島崎藤村	若菜集(1897)　破戒(1906)	有島武郎	或る女(1911～19)
	夜明け前*(1932～35)	阿部次郎	三太郎の日記(1915)
正岡子規	歌よみに与ふる書(1898)	倉田百三	出家とその弟子(1916)
与謝野晶子	みだれ髪(1901)	芥川龍之介	羅生門(1915)　歯車*(1927)
田山花袋	蒲団(1907)	永井荷風	腕くらべ(1916～17)
長塚　節	土(1910)	谷崎潤一郎	刺青(1910)　春琴抄*(1933)
石川啄木	悲しき玩具(1912)	萩原朔太郎	月に吠える(1917)

明治・大正時代のおもな文学者　数字は発表年。*は昭和期の作品。

近代的自我の確立に苦悩した文学者として，漱石とともに森鷗外(1862～1922)を見おとすことはできない。近代人としての自己意識を自覚してドイツ留学から帰ってきた鷗外は，それが当時の日本の現実と矛盾することを理性的に見すえて，傍観者的な「諦念」の立場にたった。

◎漱石の倫理的な個人主義の立場をより楽天的に受けつぎ，単純な明快さをもってそれを理想主義的に主張したのが，武者小路実篤(1885～1976)を中心とする「白樺」(1910年創刊)派の文学者たちであった。彼らは，個性の自由な伸長がそのまま人類の意志につながるとして，徹底的な個人主義の立場をとった。また，「白樺」より1年おくれて創刊された雑誌「青鞜」によった平塚らいてう(1886～1971)を中心とする女性たちは，男性中心の社会のありかたを批判して，独立の個人としての女性の解放を求める運動にたちあがりはじめた。

「青鞜」創刊号　女性だけの初の同人誌。

独創的な思想

明治の末から大正になると，西洋の思想はより主体的に摂取されるようになり，独創的な思想が形成

西田幾多郎　石川県の日本海に面した一寒村に生まれる。金沢の四高を中途退学し，東京大学の選科生となる。四高，山口高校，学習院をへて京都大学教授となり，以後京都におちつく。思索と研究に一生をささげた。禅の体験によるその独自な思想は西田哲学とよばれている。

主著『善の研究』『無の自覚的限定』

されはじめた。西洋の近代哲学の精神を学びつつ，東洋的な禅の体験にもとづいて日本の土壌のなかから独創的な哲学体系を完成させた西田幾多郎(1870～1945)，西洋哲学から学んだ方法論によって仏教や儒教あるいは日本の思想文化を深く理解し，「人間の学」とよばれる独自の倫理学を生みだした和辻哲郎(1889～1960)などがその代表である。

自己の確立の問題は，西田においても生涯の課題であった。彼は最初の著作『善の研究』において，「純粋経験」という概念を提出し，それをもとに自己確立の課題を追求した。

「純粋経験」とは，たとえば，画家がわれを忘れて創作活動に没入しているときのように，えがく自己(主体)とえがかれる対象(客体)との区別が意識されていない主客未分の状態のことであり，もっとも直接的で具体的な経験を意味している。自己や対象を意識し，いわゆる主観と客観との対立があらわれるのは，主客未分の「純粋経験」を反省的にとらえた抽象的な見かたなのである。こうした「純粋経験」の概念をもとに，西田は真の自己の確立とは，現にあるこの小さな自己を否定して，その根底にある我と物，主体と客体とを統一する大きなはたらきに帰入し，そのはたらきを自らが体得することであると考えた。

いっぽう，和辻は，人間はつねに人と人との関係においてのみ人間たりうる間柄的存在であって，けっして孤立した個人的な存在ではないという。社会とはそうした人間関係の全体であるが，それもまた，

(→p.186)

和辻哲郎　兵庫県の医師の家に生まれ，東京大学にすすみ漱石やケーベルに私淑す。京都大学助教授をへて東京大学教授となり独創的な倫理学をうちたてた。実存主義の研究にはじまり，日本人の思想的伝統と文化の探究にすすみ，人間存在の原理を明らかにしようと努めた。

主著『偶像再興』『風土』『倫理学』

それ自身として存在しているのではなく，個々人があってはじめて社会がなりたっているのである。つまり，個人も社会もそれ自身として存在するのではなく，たがいにあいまって存在するものなのである。こうした観点から和辻は，真の人間の生きかたを，社会のなかに解消することのない自己を自覚しながら，その自己を否定して人倫に合一して生きるという動的なありかたのなかに求めた。

西田も和辻も，西洋近代の「個人の発見」(→p.187)ということには深い意義を認めながら，それを克服することをめざした。そして，ともに自己を否定することによって自己は真の人間たりうると主張した。独創的といわれる彼らの思想は，こうした自己否定のありかたを核としている。それは他者や自然との融和を理想とし，「わたくし」のない心情の純粋さを尊ぶ日本の思想の伝統のうえに形成されたものであるといえよう。

社会思想の流れ

自由民権運動は，政府から国会開設の約束をとりつけるにおよんで分裂し沈滞した。その後，産業革命がおこなわれ，資本主義がしだいに発展してくると，さまざまな社会問題がおこり，それに対応して社会主義の思想と運動が本格的に登場してきた。自由民権運動の流れをくむ幸徳秋水(1871～1911)はその指導者のひとりであるが，初期の指導者の大部分は，片山潜(1859～1933)，安部磯雄(1865～1949)，木下尚江(1869～1937)のようなキリスト教的人道主義者であった。明治末期のいわゆる大逆事件ののち，運動は一時弱まったが，第一次世界大戦後，資本主義

憲政の本義を説いて
其有終の美を濟すの途を論ず

法學博士　吉野作造

去年十二月一日より東京に開かれたる全國中學校長會議に於て、高田新文相が特に訓示を與へて文部思想緊縮の急務を說きたる事と、水戸中學校長菊池謙二郎氏が起つて大隈内閣の居据りと立憲思想との關係の說明を求めて文相に肉薄したる事とは、著しく世間の耳目を惹いた。訓示の一節には、

從來歷代の文部當局者も中學校長會議に同樣の訓示を發せし事之れまであつたが如何かに、予の

労働農民党のポスター（上　労働農民新聞掲載）　労働農民党は，1926年に結成された日本最初の合法的無産政党。
吉野作造の民本主義の論文（左）　1916年に雑誌に掲載された論文の冒頭の部分。

が急速にすすむと，マルクス主義にもとづいた社会主義の思想と運動が河上肇（かわかみはじめ）（1879～1946）らによって展開されるようになった。

大正時代にはいると，自由主義的，民主主義的なものの考えかたが学問や芸術をはじめ国民生活の細部にまでおよび，大正デモクラシーとよばれる風潮を生んだ。吉野作造（よしのさくぞう）（1878～1933）はその代表的思想家で，普通選挙の実施を訴え，「民本主義」をとなえた。しかし，こうした思想や運動は，昭和にはいって経済恐慌（きょうこう）にともなう社会不安のなかで，弾圧されることになった。そして超国家主義的な思想が勢力を得，やがて第二次世界大戦へと突入していった。

戦後の思想状況

第二次世界大戦後の日本は，大きな犠牲と惨禍（さんか）をもたらした戦争への反省をふまえ，平和と民主主義を基本としてたてられた新憲法のもとに新たな出発をした。

産業・経済の復興に努めるとともにあらためて民主主義の伝統をも

つ欧米の思想や文化を理解することに努め，しだいに平和と民主主義の精神は，われわれの生活のなかに根をおろしはじめてきた。しかし，いっぽうでは，民主主義の浅い理解からくるさまざまな誤解や弊害を生じ，あまりに急激であった戦後の欧米化のありかたに対する反省や批判も生まれてきている。

戦後40年以上をへた現在，こうした状況のなかで，われわれに課せられた課題は，真に平和と民主主義をわれわれのものとすることである。そのために必要なことは，単に外国の思想を移入することでも，あるいはわれわれ自身の思想的伝統にしがみつくことでもなく，過去の幾多のすぐれた思想がそうであったように，思想的伝統をしっかりとふまえつつ，ひろく世界に目を向けて学ぶべき点を学びながら，主体的，創造的にこれらの課題にとりくむことであろう。

まとめ　日本人の思想の特質

日本人の倫理的なものの考えかたや感じかたの伝統を一言でまとめることはできないが，とくに注目されるのは，日本人がひたすら心情の純粋さを追求してきたことである。時代によって多少異なるところもあるが，清明心とか正直とか誠とかいうことばで，心情の純粋さをとらえてきた。

ひたすら心情の純粋さを重んじる生きかたとは，「わたくし」を捨てて，他者とのあたたかい共感や理解による融和を求めるものであり，また，そこに美しさを認める生きかたである。今日でも，われわれ日本人のなかには，**誠実**であることをきわめて重要なことと考えている人が多い。誠実が重視されるのは，心情の純粋さを重んじる伝統が今日まで受けつがれていることをよく示している。

しかし，誠実に行為すれば，じゅうぶんであるかということについ

ても考えてみる必要があろう。伝統をただ継承するのではなく，それと対決することも必要なのである。先人が外来思想を日本的なものとして生かす努力をしたことに学んで，われわれも西洋やインド，中国の伝統のなかにある普遍的な理法や客観的な規範を謙虚に受容することがたいせつである。そのことによって，われわれの伝統もさらに豊かな内容をもって深められるであろう。

研究問題

1 『歎異抄』,『正法眼蔵随聞記』を読んで，親鸞と道元はわれわれになにを語りかけているか，レポートにしてみよう。

2 親鸞，道元，日蓮の思想を比較し，それぞれのちがいを明らかにしてみよう。

3 江戸時代の儒学者を調べ，それぞれの思想のちがいをまとめてみよう。

4 本居宣長は人間や人間の生きかたをどのようにとらえているか，調べてみよう。

5 福沢諭吉の『学問のすゝめ』を読んで，自主，自由，独立をどう考えたかをまとめてみよう。

6 内村鑑三の『代表的日本人』を読んで，日本人の伝統的価値をどこに見いだしているか，話しあってみよう。

7 われわれ日本人は，どのような考えかた生きかたを求めてきたか，日本の風土（自然）や伝統とのかかわりで考えてみよう。そして，自分自身はなにをだいじにして生きるか，レポートにしてみよう。

8 つぎのことばを具体例をあげて説明してみよう。

清き明き心　弥陀の本願力　絶対他力　捨身の行
修証一等　法華経の行者　誠　もののあはれ　数理
学と独立心　二つのJ　自己本位　純粋経験　間柄
的存在